
人魚の夜

唐務新斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚の夜

【Nコード】

N77470

【作者名】

唐務新斗

【あらすじ】

海で死んだ恋人が人魚になって戻ってくるといっておとぎ話を信じた男が、冬の海を訪れる。

そして、暗い海から、男のいる浜辺を目指してやってくる一つの影があった……。

月の光が青く映えていた。

煌々と輝く満月は、夜の小さな星々のきらめきを従えて、静寂の夜を支配する。

季節は、冬。風すら凍る澄み切った大気の下に、どこまでも海が広がっていた。波飛沫は穏やかに、しかし飽くことなく、ざざぁん……ざざぁんと何度も何度も、夜の静寂を侵して震わせる。

白い波が無数の泡沫となって砕け散り、小さな水球の群はくると回りながら大きな海へと帰る。そしてまた波が立ち、砕け散り、そして再び波が現れる。少しずつ形と場所を変えながら、幾千幾万とその営みは繰り返される。

その様子を、果たして何に例えるべきか。いや、海は、海に過ぎない。

ただ、海からきて海へと帰っていき、そしてまた、海から現れてまた戻る。

ただ波の音だけが聞こえる静かな夜の浜辺を一人の若い男が足跡を残していく。ぎりぎり波が届かぬところを選んで、時折海の彼方に視線を向けつつ、ただ歩く。黒いコートですっぽりと身を覆っているが、身を切るような寒さを防ぐには不完全のようだ。ぶ厚いコートの下でかすかに震えながら、それでも男はこの暗く寒い海へと足を運ばずにはいらなかった。

彼は探して、そして待ちわびている。

冷たい満月の光に誘われて、この浜に現れるという人魚を。

胡散臭い話だ、と彼自身も思っている。ただのおとぎ話に過ぎない、そう思いつつ、だけれども縋らずにはいらなかった。

海の間こうで、何かが跳ね上がったような気がして、彼は慌てて歩みを止める。しかし、いくら目を凝らしても、人魚の姿は見えない。落胆の吐息を漏らしつつ、未練がましく彼は立ち尽くす。

そして、今は亡き恋人の名を心の中で呼びかけた。

彼女はよく言ったものだ。

「私はここの海が一番好き」

そんな彼女と、仲違いをしてしまった。原因はよくあることで、「仕事と私、どちらが大切なのか」。彼からすれば、どちらも大切なことで、ただベクトルが違うだけのことなのに、どうやっても彼女には通じなかった。果ては口論となり、ついに彼は手を上げかかり、すんでのところで思いとどまったが、彼女は怒りに燃えた冷たい目で彼を睨みつけ、無言で彼の部屋から去っていった。

そして彼に告げることなく、彼女は友人とともに旅行へと出かけてしまったのだった。一度は行ってみたいね、と互いに話し合っていた海へと。いつか一緒に、と話していたのに、彼女は彼を置き去りにしていった。

そして、二度と戻らなかった。ついに訪れた憧れの海で、彼女たちを乗せたボートが転覆したのだ。海の底へと彼女は投げ出されて沈んでいってしまった。必死の搜索の末、彼女以外の友人の遺体は発見されたが、彼女の遺体はついに上がらなかった。しかし、密かに彼女が助かった可能性は万に一つもないだろう。

事故の原因はボートの整備不良だと報道されたが、彼は自分の言動を悔い、己を責めることしか出来なかった。

彼女は、彼を恨んだまま、今も冷たい海の底に沈んでいるのだろうか。

そして、思い出した昔話、胡散くさいおとぎ話。

海で死んだ女が、愛しい者に再び会うために、人魚の姿となってこの浜に現れる。

そんなバカな、あり得ない。

何度も自分に言い聞かせ、否定して、それでも彼はやってきてしまった。

実際のところ信じているのは、こんなおとぎ話ではないのだ。

どんな海よりも、故郷の海が一番好き、と言った彼女の言葉を信

じている。

それは海の底にあった。

それは何にも似ていなかった。魚でもなく、貝でもなく、タコやイカでも、なまこでもなく、海藻でもない。

その周りには生ある者は近寄らず、その周りはぼつかりと暗闇が口を開けていた。

何もいない、闇だけがある、静かな海の底に、それはただあるだけだった。

いつからそうだったのだろうか。

知らない。誰も知らない。それ自身も知らない。

無。その海の底では、時が凍り付いたようだった。

だが、ある日のこと。ついに暗闇の領域が侵された。はるか海上から、なにかがゆつくりと沈んできたのだった。

水のおいが変わったことにそれは気がつく。

そこからすべてが変貌していく。

食いたい。

それは空腹をおぼえた。今まで何も食うことなく、そこにただあったそれは、初めて食うという行為を意識した。

ゆらり。ゆらり。

沈んできたものに寄り添い、大きく口を開けて食らいつく。肉を食らう口、満たされる腹をそれは持っていたのだ。ずいぶん長い間、無我夢中で貪り続けた。

カチンとした固い歯ごたえのものをごくりと飲み下すと、急に腹がもたれてこれ以上食おうという気が失せた。

ずいぶんと小さくなった食いかけを暗闇の中に残して、それは優雅に体をうねらせて泳ぎ出す。

今や、その姿は大きく変貌していた。

なにかに導かれるように泳ぎ続けるその姿は、半分人に似ていて、半分魚に似ていた。

夜は更け、張りつめた空気の冷たさは鋭い針のように男の肌を突き刺した。手袋越しに両手をこすりあわせるが、冷えきった指先はかちこちに固まり、なかなか暖まらない。

砂浜には彼の足跡が長々と残されていた。

しかし、これほど待っていたのに、やはりと言つべきか、海にはなにも現れなかった。

落胆しつつ、当然のことじゃないかと男は自嘲する。

海で死んだ女が人魚になってこの浜に現れるだなんて、あるはずがないではないか。

そうとも、そんなことは知っていた。

分かっていた。

それでも、彼は信じ、すがりついてしまったのだ。

重い足を引きずるようにして、男は海に背を向けた。立ち去りたいものも確かに感じる。だけれども、ここで待ち続けていたとしても、無駄に決まっている。

ばちゃん。

波の碎ける音に混ざって、別の水が跳ねる音が響く。

立ち去ろうとしていたはずの男は、ぴたりと歩みを止めた。

ばちゃん、ばちゃん、ばちゃん！

海の刻む正確なリズムを乱す耳障りな音が大きく響きわたる。この不自然きわまる水音を立てているのは果たして何者なのか。

捨てきれなかったわずかな期待が男を振り向かせる。

ちらりと影が視界をかすめたように感じた。

ほんのりとした月明かりを頼りに、男は音の方向へとさらに大きく目を凝らす。

海の波をかき分けてこちらへ近づいてくる影を今度ははっきりと認めて、男の鼓動が高鳴った。

再び波打ち際へと寄っていく。

魚ではないと言つことはすぐに分かった。魚はあんな風に、頭を

出したり引つ込めたりしながら泳ぎはしないだろう。

もつとはつきりと見えないものかと男は必死になって凝視するが、影は男の視線から逃れるようにすぐに水の中へと潜っていく。大きな魚の尻尾のようなものがぬらりと揺らめくのが見えたが、それもあつと言つ間に海の下へと没する。

あれは、人魚だろうか。

期待と疑惑がない交ぜとなり、男は悶える。早く来い、と男は小声で呟いた。

その声に向こうに届いたのかは分からない。だが、男の方へ向かつて影は泳いでくる。

じりじりとしながら男は待つ。それは長い長い時間のように思えてならなかった。しかし、その姿が少しずつだが、確実にはっきりと見えてくる。

ああ。

男は深くため息をついた。

黒く艶やかな髪に、ふつくらとした唇、白い首と肩の滑らかなライン。この厳寒の海にあつて、女の上半身は露わでなっていたが、平然としている。

人魚だ。女の人魚だ。

輪郭のはつきりしなかった大きな黒い影色のベールが満月によってはぎ取られ、ついには現実の色をまとう。

こちらを見つめる瞳は、本当に懐かしい色をしていた。

もはや間違いない。彼女は人魚となつて帰ってきたのだ。

彼の足が細かく震えていたのは寒さのせいではない。

胡散臭いおとぎ話が、ついに現実となつて現れる。

「……っ」

声にならない声が男の喉元から押し出された。

一步、男は踏み出す。海面に波紋が生じ、押し寄せる波は容赦なく足を濡らす、彼はまったく頓着しない。彼の吐く息は白いのに、身体は火照っていた。

いっさい躊躇することなく、海の中へと男は歩を進めていった。穏やかな白波をかき分けて、ゆらりゆらりと彼女もこちらへと泳いでくる。

次第に二人の距離は縮まっていく。

「ばちゃり、ばちゃり。」

男の確信は一步踏み出すたびに強くなる。

彼女は帰ってきてくれた。また会ったために。

男の胸の奥からぐらぐらと熱い思いが沸き上がる。もう腰まで海に浸かっているが水の冷たさなど気にならない。

波の上で二人の視線は絡み合い、自然と二人の唇に笑みが刻まれた。

男の記憶の中の彼女と変わらない、いや、それ以上に愛しい笑顔がそこにあつた。

「……」

絶え間ない波の音の中で、男は女の名を呼んだ。掠れた声は大きなものではなかったが、それに答えるように、女はすらりとした白い腕を広げた。誘われるままに、男は女の腕に抱かれ、そして彼女も彼女の背を抱いた。

「ごめんな。……ありがとう」

ほかにも言いたいことはたくさんあるはずだった。だけれども、今はこれしか言えない。

喉から絞り出される嗚咽、こみ上げる涙は止まらない。

抱いた肌はひんやりと冷たいが、柔らかく彼を包み込んでくれる。女は無言で男の首筋に顔を埋めた。その身体から発する強い潮の香りは、この海の香りとも少し違うように男は感じた。いったいどれだけ長い間、彼女は泳いできたのだろう。そう思うと、さらに彼の腕の力は強くなる。もう、二度と話さないとばかりに。

海は不気味なほど静まり返り、夜の空を流れる黒雲が月を覆う。濃厚の闇の中で抱擁は続いた。

やがて、一筋の強い風が吹き黒雲は追い払われて、再び満月が下

界の海を照らす。降り注ぐ光の下で、女は男を抱いていた腕を離す。いや、そこにいたのは女ではない。その姿は、先ほど抱いていた男の姿そのものだった。一方、抱擁を解かれた男の方は、からからに渴ききり、小さな干物へと変わり果てた姿をさらしていた。

首筋には、牙を突き立てられた大きな穴がぽっかりと空き、わずかに血がこびりついている。

驚きに見開かれた瞳からは、身体中から振り絞った涙が一筋流れていた。その涙は誰のために流したもののなのだろうか。物言わぬ干物はそのまま海中へと倒れ込んでいき、最期の涙は海に洗われた。

たたずむのは、かつて人魚だった者。いまや二本の足を得て、しっかりと海の底を踏みしめていた。

かれは満足そうに血で塗れた唇を舐めた。かれは男のすべてを吸い取った。血を、命を、その姿を。

そして、かつて男が身につけていた衣服を拾い集めると浜へと上がり、ずぶ濡れでも一切構わず、男の衣服を身につけた。

もはや人魚であった面影はまったく残っていない。

完全なひとりの男だ。

かれの満腹しきった胃が、急にひきつる。不快感にかれは表情を歪ませ、違和感の元である異物を吐き出した。手のひらの上に、ぬらぬらとした胃液にまみれた小さな女性用のリングが鈍い光を放っている。かれはしばらく不思議そうにそれを見つめていたが、海に向かつて力一杯放り投げた。

夜空の星のような小さな輝きは、綺麗に弧を描いていく。水面にぽちゃんと小さな波紋が浮かび、すぐに消える。

リングは沈んでいく。かつて男だった干物が、そこにあった。その指には、同じようなデザインのリングがはめられている。

大きく海が揺れると、指からするりとリングが抜けた。

ふたつのリングはそろって海の流れに乗って遠く流されていく。かれは声を立てずに笑い、海から背を向けると一切振り返らずに

歩き出した。

海の闇には目もくれず、真夜中でも煌々と明るい街を目指して。

（後書き）

初投稿です。こんな感じでいいのかドキドキものです。もっと色々設定があつたはずですが忘れてしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7747o/>

人魚の夜

2010年11月7日20時34分発行